

\*

音楽の授業の後、リョーマがいつもより少し出遅れて音楽室を出ようとする、その直前、先生に呼び止められてしまった。

「越前くん、今日は日直よね？この楽譜、しまつて来てもらえる？」

そう言つて教壇の上に回収された楽譜に、手を乗せる女教師。リョーマはふいと周りを見渡したが、どうやらもう一人の日直は先に教室へ戻つてしまつたらしく姿は見えなかつた。内心ため息をつく、薄い楽譜の束は誰かと手分けして運ぶほどでもない。彼は大人しく頷き、それを一人で資料室まで運ぶことにした。

さつさと仕事を終えてしまおうと資料室へと急ぐと、そこには先客がいたらしく奥の方で小さな物音。リョーマも、楽譜の棚があるはずである奥の方へと入つて行く。少し広くなつた空間。そこにいたのは一人の女子生徒だつた。何か小さなメモを片手に、薄茶けた楽譜が並ぶ棚を指でなぞりながら目で追つている。少し困つたようにすぼめられた唇、その緩やかな指の動き。リョーマは何故だか自分でも分からないまま、それらを目にして、自分の体が動かなくなつた。人間のそんな僅かな動作に見入つてしまう経験など今までに覚えがなくて、自分自身に戸惑うリョーマ。その彼女の顔がこちらに向けられて、更に戸惑つた。思わずその視線を避けるように下を向く。

「どうしたの？」

柔らかい声が発されて、リヨーマは何とか「これ、しまうように言われて——」とだけぶつきら棒に答える。その雰囲気からして恐らく二年か三年の先輩なのだろう。しかし、どんな年上に対しても、所詮は同じ人間なのだからと物怖じしたことなどないのに、何故この彼女の前でいつもの自分が封じ込められてしまうのか。悪循環のように、彼女と自分自身に戸惑う。だが彼女の方はそんなことは知るはずもなく、彼の方へと近付いて来て、「どれ？ちよつと見せて？」とその手元から楽譜を一冊抜き取った。ついさつき見とれた指先が目の前を横切る。そして、すぐ傍でクスクスと小さな笑い声が響いた。

「ああ、これ。私も一年の時に歌ったよ。懐かしいなあ」

目を細めて笑う彼女。その表情を間近で見ても、何となく罪悪感のようなものを感じ、リヨーマは再び視線を逸らした。そんな彼の様子に少しだけ首を傾げながらも微笑ったまま、彼女は彼から楽譜を全て引き受けようと手を差し出す。

「よく使う合唱曲の楽譜はこつちにまとめて置いてあるから」

「ああ……はい、どうも」

「どういたしまして」

よいしょ、と小さな掛け声とともに、受け取った楽譜を左端にあつた棚の空間にしまい込む。そしてパンパンと軽く手を払った後に再びリヨーマの方を振り返り、一瞬不思議そうな顔つきをして、ぐいとその顔を彼の方へと近付けて来た。あまりに突然の、予想外の行動で、リヨーマの方は顔を逸らす隙もない。

「もしかして、きみ、越前くん？」

「は？はあ……そうだけど……」

「やっぱりそっか。帽子被つてなくて制服だから分からなかったよ」

そう言いながら、さつきよりも少しくだけた笑みを浮かべる。しかしリヨーマの方は彼女に見覚えなどなく、頭の中はハテナマークだらけだ。隠しもせず訝しげな表情をすれば、彼女は「ああ、ごめんごめん」と笑つて言つた。

「テニス部の期待の新人くん、でしょう？」

「……別に、そんなんじゃないっす」

「この前、偶然国光くんたちが話してたの聞いたから——て、あつ」

慌てて口元を手で押さえる彼女。何故そんなに慌てるのかも分からず、その「国光」という男が誰なのかも分からなかつたりヨーマは、いつそう怪訝そうに眉根を寄せた。けれど、その疑問の回答を得る間もなく、授業の予鈴が鳴り響く。その音に彼女は「大変！」と一層慌てて、目の前の柵に向き直つた。

「この楽譜、全部揃えなきゃいけないんだつた」

「……手伝おっか」

手元のメモに視線を戻す彼女に、リヨーマは咄嗟にそう申し出たけれど「大丈夫、すぐ終わるから」と笑顔で断られた。

「ありがと。早く教室に戻つた方がいいよ」

もう一度、彼女はにっこりと笑ってそう言い、すぐに楽譜の並ぶ棚へと視線を戻す。その内容を確認してから、薄い楽譜の背を指でなぞり、再び、最初に見た時のような光景。彼の足が動くことを拒む。けれど何てことない顔を作って、無理やりにそれを出口の方へと向かわせた。

「何だよ、越前。なに赤い顔してんだよー」

途中で本鈴が鳴ってしまい、走って教室に戻ると、廊下側の席に座っていた堀尾がすかさず声を掛けて来た。走ったと言っても所詮校舎内のこと、息が切れるほどの距離ではない。しかし自分でも少しだけ顔が熱い自覚のあったリョーマは、素っ気なく「走ったからじゃない？」とだけ言って、さっさと自分の席につこうとした。が、ふと思ひ立ち、堀尾の方を振り返る。

「――ねえ、クニミツって人、知ってる？」

「は？クニミツ？誰だよそれ」

テニス部のことに限らず、色々な情報に通じている堀尾のことだから、もしかして知っているだろうかと思っただが、さすがにその名前は聞いたことがなかったらしい。それをこっぴど聞きたいんだけど、と言いかけたが、リョーマは「知らないならいい」とすぐに踵を返した。

「え、何だよ、そいつがどうかしたのか？」

堀尾はそのリョーマの口から出て来た名前の方に興味を示し、椅子から立ち上がりかけ

だが、前のドアから先生が入って来てしまい、追究することはかなわなかった。やれやれとため息をつき、椅子に座るリヨーマ。教科書を開きながらふいと顔を窓の外に向けると、中庭を挟んで特別教室棟が見える。

楽譜は全部見つけられたんだろうか。

頬杖をつけて目を閉じると、ついさつき資料室で会った彼女の姿が瞼の裏に浮かぶ。自分のものとは全然違う、ほっそりした長い指。ほんの少し尖らせた赤い唇。心地よい笑い声。

——俺、何考えてんだ。

その頬についた手から伝わる体温に、さつき以上に自分の顔が熱くなっていることに気付いたリヨーマは、すぐに視線を黒板の方へと移す。先生が教科書にあった公式を書きながら、色々と説明をしている。授業の方に神経を集中させようとリヨーマもその式をノートに写してはみたが、一向に頭に入って来る感じがしない。瞼など閉じなくても、真っ白なノートの上に、彼女の姿が浮かび上がる。思い出さないようにと意識すればするほど、体はそれに抗うようにと頻繁に。

その「クニミツ」という男が、実は手塚のことだと彼が知ったのは、もう少し後のことだ。